

## しあわせなにおい

田中 悠翔

ピピッ。ピピッ。

呼吸や心拍を測る機械の音が病室に響く。ぼくは音が鳴るたびに、振り返って、何度も波形を確認する。ベッドに横たわるおばあちゃんの鼻には、まだチューブがついていた。母は、おばあちゃんのほったをなでながら、「お母さん、ありがとうね。おつかれさま。」震える声で話しかけていた。今まで見たこともない号泣の姿の母を見ると、また波形が動き出すことを願わずにはいられなかった。鼻の奥がぎゅーんと痛くなって涙がこぼれた。

長い休みには、広島のおばあちゃんの家に行くのが恒例になっていた。僕達の到着をとても楽しみにしてくれていて、

「よう来てくれた。ありがとうねえ。」

と、いつも玄関から飛び出してきて出迎えてくれた。テーブルには収穫したての野菜や、近くの海でとれたばかりの魚の料理が食べきれないぐらい並んだ。おじいちゃんが、

「こりや祭じゃ。普段とちごうて、えらいごつつおうじゃ。悠翔が来たからじゃのう。」と、にやにやしながら言った。

「そりや、悠翔が来るんじゃけん。張り切るわいね。ねえ、はやちゃん。」

と、ぼくを抱っこしたおばあちゃん。おだしのいいにおいがした。つい最近のことなのに、とてもとても昔のことのように思える。

おばあちゃんの病気はみるみる悪化していった。歩くことも困難になり、食べることも全く楽しめなくなっていた。あのふつくらした腕がどんどん細くなっていく。おばあちゃんが食べることができた日は、

「わあ。今日は食べてくれた。ありがとう。」家族みんながほめた。少しでも元気になってほしかったからだと思う。

「悠翔が赤ちゃんの時、あんまりごはんを食べんかったけん、食べてくれたらうれしかったけど、逆の立場になってしもたなあ……。」  
少しさみしそうにおばあちゃんはつぶやいた。

ベッドから起き上がることができなくなったおばあちゃんのそばにいたくて、となりにころんと横になった。二人でテレビを見た。

「はやちゃん優しいね。ありがとうね。」

手の平で頭をなでてくれた。ほくは泣きそうになったのがばれたくなくて、おばあちゃんの懐に顔をうずめた。前はおだしのにおいがしていたけれど、もうしなかった。それでもほくは胸いっぱいおばあちゃんのおいを吸い込んだ。やっぱりいいにおい。

「おばあちゃん、ありがとう。大好きだよ。」

二人きりで話したのはこれが最後だ。

おばあちゃんのまわりにはいつも、「ありがとう」がいっぱいだった。ありがたいと思う気持ちの大切さを、言葉でも態度でも教えてもらった。「ありがとう」には、「しあわせ」な気持ちがたくさん入っていると思う。ほくはそれをしっかり引き継いで生きていきたい。

#### 評価のポイント

祖母がどんな人なのかがよく分かる。セリフに血肉が通っていて心が揺さぶられる。